

● BATTLE GREEN 13 ●

私

私は町の行政委員の依頼で、町の将来のために調査と提案を行う小委員会の委員をいくつ引き受けたことがある。それらは、「町に存在する対立の種類の原因を特定する」小委員会、「住民の建設的な対話の方法を提案する」小委員会、そして去年から今年にかけての「町の人口動態の特徴とそれにまつわる問題点を特定する」小委員会である。

最初のふたつの委員会で学んだことの一部は二〇〇七年六月号掲載の同連載『憎しみ』のない町の舞台裏「後編」で簡単に紹介したが、ポストン周辺のコミュニティが抱える多様な問題をおわかりいただくために、もういちど詳しく町の歴史をご紹介します。

レキシントン町は、「建国の英雄」の子孫にアイルランド系やイタリア系の移民が加わったものの、長期にわたって人よりも牛の数のほうが多いような農業中心の小さな町だった。そののんびりした町に変化をもたらしたのは、第二次世界大戦後の経済ブームである。町は急速にポストン市のベッドタウン化して工業と商業が盛んになり、農家はそれにしたがって減少の傾向をたどった。だが、もっと劇的に町の様相を変えたのは、自然が残る環境を求めて五〇年代から六〇年代にかけてケンブリッジ市界隈から移住してきたハーバード大学やマサチューセッツ工科大学の職員たちであった。町には、言語学者で思想家のノーム・チョムスキー、ノーベル平和賞のヘンリー・エイブラハム、知

的巨人と呼ばれるエドワード・オズボーン・ワイルソンなどに代表される知識人たちが増え、戦争直後には民主党員が四人しかいなかった保守的な町は急速にリベラルに傾いていった。

新しい住民たちは、レキシントン町の公教育に大きな影響を与えた。

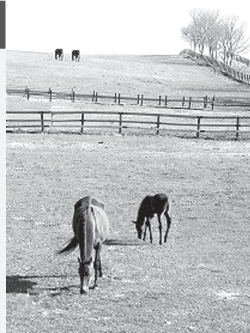
大学で教える彼らは、自分の子供にとつて理想の学校教育を実現することに情熱を抱き、学校と協力していろいろな改革を試みた。六〇年代の米国東部は革新的なアイデアに満ちていて、「何ができるか、まずやってみようじゃないか」という時代だった。国や州だけでなく、町の公立学校にも標準カリキュラムなどというもの

はなく、それぞれの学校が勝手にカリキュラムを作っていたというのだから驚く。「子どもたちに自由やゆとりを与えたいが、すばらしい能力が生まれる」という考え方がもてはやされたのもこのころである。現在町に六つある小学校のひとつ、エスタブルック小学校は、ハーバード大学とレキシントン公立学校の提携で「チーム教育」という新コンセプトを実現するために、一九六一年に設立されたユニークな学校だ。学校の建物も能力別クラスと講義を行いやすいようにデザインされたのだが、小学校での講義や能力別クラスの問題点が明らかになり、試行錯誤を重ねたもののチーム教育は自然消滅の運命をたどった。しかし、教育熱心な保護者に支えられたエスタ

バトルグリーン／連載エッセイ13

渡辺 由佳里

変わりゆく
コミュニティ



ブルック小学校の学力が突出したために、レキシントン公立学校は残りの五校を同じレベルに引き上げるように努力するようになった。

このような公立学校の努力が噂になり、「良い教育」を求めて教育熱心な親たちがレキシントン町に移住してくるようになった。そのころ、他の町からレキシントンに越してきた隣人たちにこの町を選んだ理由を尋ねると、必ず「公立学校がよいから」という答えが戻ってくる。ただし、その「よい公立学校」の定義は、最近越してきた親たちのように「MCASのランキングが高い」とか「数学チームが強い」といったものとは異なる。五〇年代、六〇年代の親たちにとっては、子供に考える能力を身につけさせる理科と社会科の授業であり、豊かな音楽や美術のプログラムであり、早期からの外国語教育であった。

そのような「よい教育」に惹かれて、第二次大戦後には皆無だったユダヤ系の住民が急増し、引き続いてアジア系移民が増え始めた。最近の「町の人口動態の特徴とそれにまつわる問題点を特定する」小委員会でわれわれが驚いたのは、このアジア系住民の増加があまりにも劇的に進んでいることだった。

私と同年でエスタブルック小学校に通っていた隣人に尋ねると、そのころアジア系の生徒はほとんどいなかったと答えた。マサ

チューセッツ州の公式記録(<http://www.doe.mass.edu>)によると、私の娘が幼稚園に入学した一九九八年度のアジア系の生徒は全体の14%だった。当時ですら「なんてアジア人が多いのだろう」と感じたものだが、今年二〇〇七〇八の数字には目を疑った。なんとアジア系の生徒がその二倍以上の%になっていたのである。私の娘のようにふたつ以上の人種で登録している生徒も加えると、ぱっと見た目にはアジア人が半分近くに見える。高校のオーケストラでは白人はまれな存在だ。

増えたのはアジア人だけではない。中東、ヨーロッパからの移住者や海外赴任の「外国人」も増え、英語が母国語ではない生徒は二割近くで、英語力に限界がある生徒は4%ほどである。

二世以上前からのこの町に住み続けた旧住民たちは、自分たちが少数派(マイノリティ)になっしまったこのような状況をどうのうに受け止めているのだろうか？ それがすべて好ましいものではないことは、容易に想像がつくだろう。(つづく)

★プロフィール★
わたなべ ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はポストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。
<著者のブログ>
<http://watanabayukari.weblogs.jp/>